

最優秀賞

地域文化研究部門（団体）

吉野川下流域の高地蔵に迫る

徳島・徳島文理高等学校
郷土研究部
(森崎陸斗、前田哲宏、松原圭佑)

応募の動機

僕たちは、5年前から「なぜ、高地蔵が徳島には多いのだろうか」と疑問に思い、調査を開始しました。最初は、高地蔵がどこにあり、どんな内容かを調査してきましたが、今回は洪水との関連、高地蔵がなぜ造られたのか、高地蔵のもつ意義は何かを中心に高地蔵に迫ることにしました。

研究レポート内容紹介・今後の課題

高地蔵とは、地蔵像の下に高い台座を積んだ石造物のことです。川の多い徳島で洪水に悩まされていた人々が、洪水で何度もお地蔵さんが流されてしまうので、台座にのせたのです。そんな地蔵が、地元の方から愛着をもって「高地蔵」と呼ばれました。僕たちは、高地蔵の大きさ・種類・年代・向きなどを調査し、それらを地図にまとめ、分析・研究しました。なお、今回は台座の高さが1 m以上または像を含めた高さ1.5 m以上を高地蔵としました。今回の調査対象とした地域である吉野川下流域とは、現在の行政区画でいうと、徳島市から吉野川北岸では板野郡・鳴門市・阿波市吉野町、南岸では名西郡石井町・吉野川市鴨島町の範囲の地域を指します。この吉野川下流域で調査に分析した高地蔵は279基です。

最も古い高地蔵は、宝永4（1707）年の徳島市沖洲町元浦の高地蔵で、最も新しいのは2014年の北島町正通寺の高地蔵です。高地蔵の紀年銘から20年刻みで造立年を分析すると、最も多く造られたのは、1740～1759年で39基、次いで1760～1779年が36基です。つまり、江戸時代中期後半に多いことがわかります。これを地図に描いて分析すると、前半の画期では、洪水の範囲を知ることができました。

最も高い高地蔵は、徳島市国府町東黒田のうつむき地蔵です。台座高が271.5cm・総高411.5cmでした。そこで、50cm刻みでグラフ化し、比較してみると、100～150cmが140基と最も多く、また、200cm以上が13基もあることがわかりました。高地蔵の方向は、南が若干多い程度で差はありませんでしたが、川を向いている高地蔵と川に背を向けているのは好対照でした。高地蔵が建てられている場所の標高は、2 m以下が最も多く、次いで2～4 mでした。つまり、標高の低い地域に多く建てられていることがわかります。

高地蔵の造立目的は、洪水の死者の慰霊です。また、渡し場に設けられ、船からの目印となったものや、「左国分寺 右観音寺」といった道標の役割を果たしたものもありました。これらの高地蔵の建てられた地域は、当時の藍作、塩田の中心地や新田で、経済的にも中心であったことが推定できます。

江戸時代以来、被害に苦しみながら、地蔵さんに救いを求めた人々の祈りを感じましたが、高地蔵を洪水の警鐘ととらえ、高地蔵の周辺では、普段から津波や洪水に備えておくことが大切だと実感しました。

今回は、吉野川下流域を調査地域として調査を進めてきましたが、今後は、徳島県内に調査域を広げて、調査研究を続けていきたいと思えます。



高瀬の渡しの愛宕地蔵調査風景



藍住町成長の高地蔵調査風景